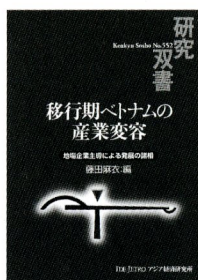


新刊紹介

藤田麻衣編『移行期ベトナムの産業変容―地場企業主導による発展の諸相』

藤田麻衣

アジア経済研究所
2006年

業を新たな担い手とする農村工業の始動などがあげられよう。

これまでは、地場企業を貿易自由化の進展などによって早晚淘汰されるであろう脆弱な存在と捉え、その勃興を一過性のブームとみなす視点为主流であった。しかし、個別の産業や企業の発展過程を仔細に辿っていくと、ドイモイ以前から受け継がれた基盤から出発し、ドイモイ後の市場経済化や対外開放の進展の下、企業内ないし外部から動員された資本や人材、技術を駆使することにより着実な成長を遂げている事例が数多く出てきていることが明らかになる。本書は、このような地場企業主導による産業発展過程の考察を通じて、ドイモイ下で生じたベトナム経済の変容の一端を明らかにしようとする試みである。

本書は、序章に続き、個別の産業・産地の発展過程を考察した六章から構成される。各産業・産地の主たる担い手は、大規模な国有企業から民間企業、合作社、企業として登録されていない事業体までさまざまであるが、いずれの章も詳細な実地調査に基づき、企業の参入と成長、市場の変化と企業の対応、生産・流通構造、中央・地方政府の施策といった諸問題に迫っている。

第一章「ベトナムにおける乳業の発展過程と課題」は、基礎栄養食品としての乳製品への需要が拡大するなか、乳業が国有企業VINAMILKに牽引された発展を遂げてきた

ものの、近年では市場の成長が新たな参入と競争をもたらしていると指摘している。

第二章「ベトナムのプラスチック成形産業における構造変化と企業成長」は、ホーチミン市の民間企業の活発な参入によるプラスチック成形産業の成長と構造変化を分析し、新たな発展段階における成長を牽引する「旧来型大企業」の成長要因と限界を論じている。

第三章「ホーチミン市の『独自ブランド型』アパレル産業の生産・流通組織」は、独自のデザイン・企画によるブランド確立を図る新興アパレル産業を分析し、知識集約的機能を担うことによる製品の差別化、生産・流通機能の内部化という特徴を指摘している。

第四章「ベトナム農業工業化政策の展開」は、ベトナムの農村工業化政策の展開と農村工業の実態を、全国的な農村工業奨励策の形成においてモデル的な役割を果たしてきた南部メコンデルタ・アンザン省の事例を中心としつつ考察している。

第五章「ベトナムの産業振興と地方政府の役割」は、北部バクニン省ドンキ木工村の発展における地方政府の役割を考察している。近年、各地で地方政府の主導により建設が加速している工芸村工業団地の功罪についても検討を試みている。

第六章「ベトナム伝統工芸産地における生産構造の変容」は、市場経済化後のパッチャン伝統陶磁器村の

展開を分析し、その生産構造は、輸出量の増加と輸出市場の多様化、製品の多様化、生産工程の効率化、生産主体の多様化に特徴付けられると論じている。

本書から明らかにされたのは、対外開放の進展を原動力とした急速な変化を遂げつつも、伝統的側面を未だ色濃く残したベトナム経済の過渡的状況である。地場企業主導による産業発展は、ドイモイ初期の国内外の市場の拡大を契機とした新旧の地場企業の勃興を経て、国際経済参入の進展が競争の激化、企業間の格差の拡大をもたらす新たな発展段階に突入している。この新たな局面においては、海外市場へのアクセスや海外的機械・設備、技術、生産・品質管理システムの導入などによって飛躍的な成長を遂げる企業が現れている。他方、流通や金融など、対外開放や改革が遅れている分野では、伝統的な担い手や制度が中心的な役割を果たし続けており、このことが生産者のとりうる戦略に対し一定の制約を課している。

ベトナムの世界貿易機関(WTO)加盟が目前に迫った現在、地場企業もさらなる競争と淘汰の時代に突入しようとしている。WTO加盟後の加速が予想されている流通や金融分野の市場開放が地場企業にどのような影響をもたらすのかなど、注視していくべき課題は多い。

(ふじた まい/アジア経済研究所地域研究センター)

近年におけるベトナム経済の変容ぶりには目を見張るものがある。すでにいくつかの研究がなされている外国投資主導による輸出産業の興隆はその象徴であるが、その後で、多くの地場企業が勃興し、次々に新たなビジネスや製品を生み出し続けていることにも徐々に注目が集まりはじめている。代表的な動きとしては、食品・飲料などの分野における国有・民間の大企業の出現、都市・農村部における民間中小企業の設立件数の急増、さらに、これら民間企